

ブラームス:交響曲第1番 ハ短調 Op.68

20余年に及ぶ紆余曲折の末、ブラームスが43歳にして世に出した最初の交響曲。ロマン派の同ジャンル屈指の人気作でもある。第1番が異例なほど遅くなった要因は、彼が生来もつ慎重さや自己批判の強さに加えて、ベートーヴェンの後に交響曲を作る必然性を問い続けたことにあった。その1つの解答としてようやく生み出したのが、古典的形式美とロマン的感性が見事に溶け合った本作である。

最初の構想は1855年頃といわれているが、20年もの間書き続けていたわけではなく、まずは断片的に作曲し、1862年に第1楽章の原型を完成後また中断。1874年に本腰を入れ、2年をかけて完成した。そして1876年11月カールスルーエにて初演され、当時随一の指揮者でピアニストのハンス・フォン・ビューローから「ベートーヴェンの9曲に次ぐ“第10交響曲”」と賞賛された。

本作は、ベートーヴェンの“苦悩から歓喜へ”の精神を継承しており、ハ短調からハ長調に至る、「運命」交響曲と同じ構成がなされている。しかし同時に、重厚さと歌謡性を併せもったブラームスの個性が漲っており、重量感やスケール感も比類がない。

第1楽章:ウン・ポーコ・ソステヌート — アレグロ。ティンパニの連打が印象的な、重く分厚い序奏の後、劇的な主部に移行。2つの主題を中心に、緊張感を保ちながら進む。

第2楽章:アンダンテ・ソステヌート。歌謡的で寂寥感が漂う緩徐楽章。後半には美しいヴァイオリン独奏も登場する。

第3楽章:ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ。通常のスケルツォではなく、ブラームスらしい優雅な間奏曲風の楽章。柔和な主部に、激しさを加えた中間部が挟まれる。

第4楽章:アダージョ — ピウ・アンダンテ — アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・プリオ。同楽章のみトロンボーンが参加。重く劇的な序奏から、ホルンのフレーズで暗雲が晴れた後、主部へ移り、流麗なメイン主題が登場。複数の素材をまじえながら推進力溢れる展開を続け、壮麗な盛り上がりを見せる。

柴田 克彦 (しばた・かつひこ)

音楽マネジメント勤務を経て、フリーの音楽ライター・評論家&編集者となる。「ぶらあは」「びあクラシック」「モーストリー・クラシック」「CDジャーナル」「バンド・ジャーナル」等の雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレットへの寄稿、プログラム等の編集業務、講演や講座など幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。